

「JENESYS2019」日本青年研究者訪中団 参加者の感想（抜粋）

○今回の研修では、中国外交部や中連部のような中国の中核部分から、内陸部（特に一帯一路に関連する地域）にいたるまで、怒濤のスケジュールであったにも関わらず、バランス良く様々な分野を視察でき、非常に達成感があり、またたくさんの学びを得ることができました。

今回、日本の、特に若い世代が、中国に対して無関心だということが指摘された場面がありました。今の若い世代は、スマートフォンアプリのゲームや動画系 SNS を始め、中国資本の IT サービスを私たち以上に日常的に使っています。しかし、言われてみると確かに、あまり興味をもたれていないかもしれません。これまで、日中関係が良くなった・悪くなったという2つの方向性から日中関係を見てきて、それが将来どちらに進んでいくのか（良くなっていくのか）という観点で議論をしてきましたが、今後は「無関心」という状態があり得るという、新たな気づきを得ました。

私が初めて北京を訪れたのは大学生の時で、その際にも、今後の日中関係はどうなっていくか、という共通テーマをもって現地の学生と交流を行いました。その際の共通認識は、日中関係が非常に冷え込んでいる状況でいかにより良い関係性を構築していくか、というものでした。今回は、そのころに比べると日中関係は改善し、中国経済はますます影響力を増してきたように実感しました。自分の中で、そうした比較の視点ができただけで、日中関係への理解も深まったように思います。

○今回の訪問を通じて、日中関係が好転していることを実感した。2014年の留学時には、日本と言えば尖閣問題が常に話題となっていたが、今回は誰も言及しなかったのが印象的だった。以前は、「歴史問題は永遠に言い続ける」と言われ、滞在中には盧溝橋事件の記念日を迎えたが、歴史問題も全く聞かれなかった。

甘肅省では、砂漠化の現状を見ることができ、大変興味深かったが、日本が何ができるのかについて考えさせられた。内陸部の発展は、格差大国中国の将来にとって重要な鍵となるだろう。今後の発展を注視したい。

○日中関係について

良好な日中関係の継続には国民レベルでの相互の理解やコミュニケーションが重要であることが度々指摘された。相手国に対するイメージは、中国側が改善傾向にある一方、日本側は低水準に留まっていることが話題に上がった。日本側について言えば、中国の「ありのままの姿」と日本人のイメージの間に大きなギャップがあることは否定できない。ギャップを埋めるための政策的な努力は求められ、経済、観光、文化、教育等の多次元において中国の魅力を知れる機会を作ることが重要であると感じた。

各分野の協力については、お互いがWin-Winである分野で積極的に進めるべきとの指摘がされた。その中で、「高齢化」は両国が直面する大きな構造課題であり、医療・介護における協力の可能性はある。技術・人材育成の協力など考えられるではないか。

対外政策である「一帯一路」構想については、日本は大局観に立った戦略に基づいて、「一帯一路」への関与を進めていくべきだろう。中国は、恐らく日本との協力を利益を見出すだろうと考えられるので、日本は対等なパートナーとして「一帯一路」政策へ積極的に発言をしていくべきである。

○他の訪中団のメンバーとは異なり、はじめて中国を訪問しました。北京のみならず、甘肅省で訪問した各市の発展については、文字情報やニュースソースで聞いていた以上に、中国が成長を遂げていることを体感するきっかけとなりました。一方で、都市部から一歩抜けると直ちに現れる農村の風景と、甘

肅省社会科学院で説明のあった、農村部と都市部との大きな経済格差など、なお解決すべき問題が残っている（＝単純な大国ではない）という事実を認識できたことも幸いでした。

○北京では日中協力の現状と課題を考える最前線の現場となる政府機関を訪問し、双方の理解を深める良い機会をいただきました。アジアに対して中国がどのように向き合っているのか、同時に、アジアの中に存在する日本に対して何を期待しているのか、といったことに関する深い議論内容は、帰国後に最も伝えたいことです。国際情勢は今後も変化が著しいと思いますが、そのような中でも研究者間での交流を続けることで、相互理解の深化に努めていきたいと感じました。